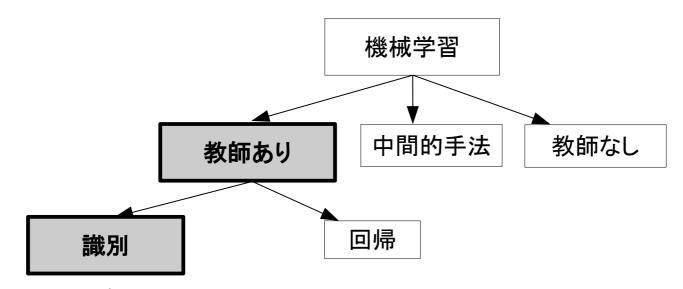
Section 2

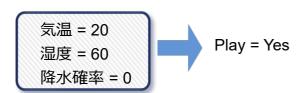
- 識別2 (4~7章)
- 機械学習ライブラリの紹介



• カテゴリ特徴



• 数值特徵



4.1 統計的識別とは

• 最大事後確率則による識別

$$C_{MAP} = \arg\max_{i} P(\omega_i | \boldsymbol{x})$$

max f(x): f(x) の最大値

 $\operatorname{argmax} f(x)$: f(x) が最大となる x

 $oldsymbol{x}$:特徴ベクトル

 ω_i $(1 \le i \le c)$: クラス

• データから直接的にこの確率を求めるのは難しい

• ベイズの定理
$$P(A|B) = \frac{P(B|A)P(A)}{P(B)}$$

$$C_{MAP} = \arg \max_{i} P(\omega_{i}|\mathbf{x})$$

$$= \arg \max_{i} \frac{P(\mathbf{x}|\omega_{i})P(\omega_{i})}{P(\mathbf{x})}$$

$$= \arg \max_{i} P(\mathbf{x}|\omega_{i})P(\omega_{i})$$

4.1 統計的識別とは

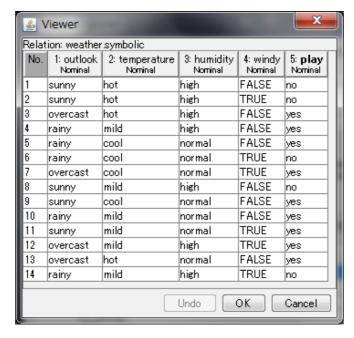
- 事前確率 $P(\omega_i)$
 - 特徴ベクトルを観測する前の、各クラスの起こりや すさ
- 事前確率の最尤推定

$$P(\omega_i) = \frac{n_i}{N}$$

N: 全データ数、 n_i : クラス ω_i のデータ数

4.1 統計的識別とは

- 尤度 $P(x|\omega_i)$
 - 特定のクラスから、ある特徴ベクトルが出現する尤もらしさ
- d 次元ベクトルの場合の最尤推定
 - 値の組合せが データ中に出 現しないもの 多数



Weka の weather.nominal データ 3×3×2×2=36 種類の組合せ

4.2.2 ナイーブベイス識別

- ナイーブベイズの近似
 - 全ての特徴が独立であると仮定

$$P(\boldsymbol{x}|\omega_i) = P(x_1, \dots, x_d|\omega_i)$$

$$\approx \prod_{j=1}^d P(x_j|\omega_i)$$

$$C_{NB} = \arg\max_i P(\omega_i) \prod_{j=1}^d P(x_j|\omega_i)$$

5.2 数値特徴に対するベイズ識別

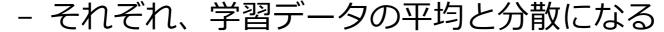
5.2.1 数値特徴に対するナイーブベイズ識別

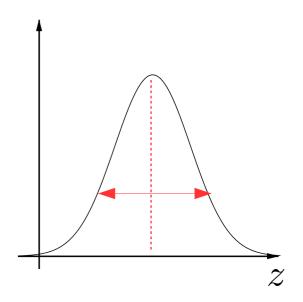
$$C_{NB} = \arg\max_{i} P(\omega_i) \prod_{j=1}^{d} p(x_j | \omega_i)$$

- 確率密度関数 $p(x_j|\omega_i)$ の推定
 - 正規分布を仮定

$$p(z) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}\sigma} \exp(-\frac{(z-\mu)^2}{2\sigma^2})$$

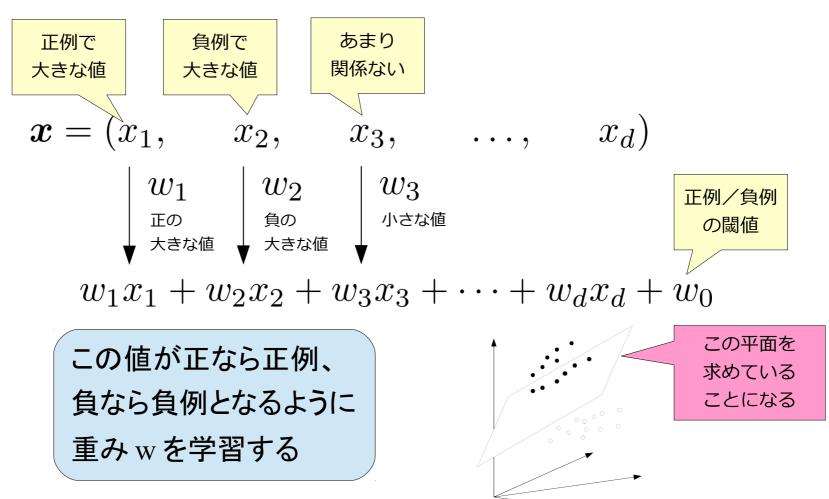






5.3.1 識別モデルの考え方

• 事後確率を直接求める



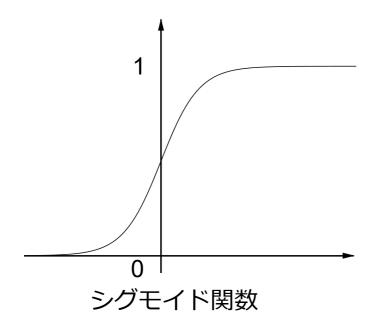
確率と対応づけるには?

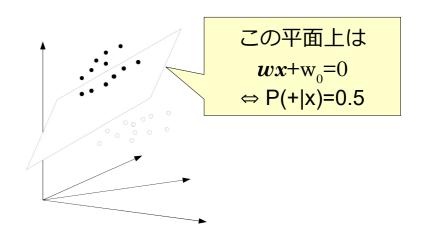
5.3.1 識別モデルの考え方

- ロジスティック識別
 - 入力が正例である確率

$$P(\oplus | \boldsymbol{x}) = \frac{1}{1 + \exp(-(\boldsymbol{w} \cdot \boldsymbol{x} + w_0))}$$

-∞ ~ +∞ の値域を持つ ものを、順序を変えずに 0 ~ 1 にマッピング





5.3.2 ロジスティック識別器の学習

• 最適化対象=モデルが学習データを生成する確率

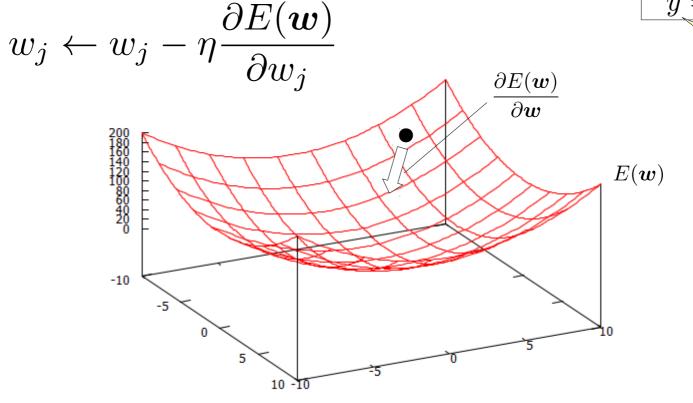
$$E(\boldsymbol{w}) = -\log P(D|\boldsymbol{w}) = -\log \prod_{\boldsymbol{x}_i \in D} o_i^{y_i} (1 - o_i)^{(1 - y_i)}$$

 $o = P(\oplus | \boldsymbol{x})$

y = 0 or 1

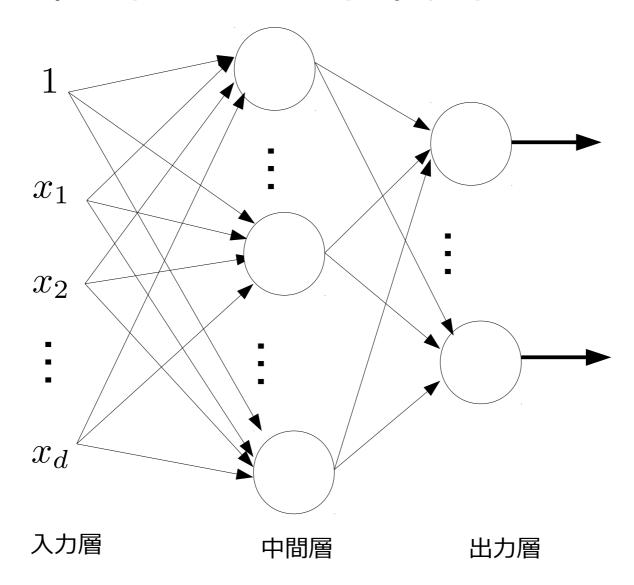
正解ラベル

 $oldsymbol{E}(oldsymbol{w})$ を最急勾配法で最小化



6.4 ニューラルネットワーク

• 3層のフィードフォワードネットワーク



6.3 最小二乗法による学習

- シグモイド関数の適用
 - 多層の誤差修正に対応するために、勾配計算の際に 微分可能な活性化関数を用いる

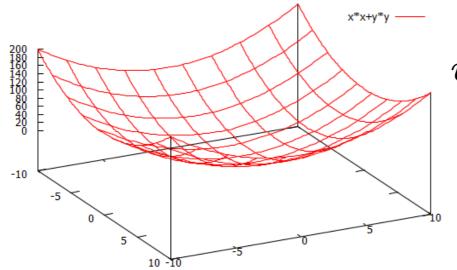
ロジステック識別 w_0 活性化関数 x_1 w_1 w_2 x_2 w_d x_d $\sigma'(h) = \sigma(h) \cdot (1 - \sigma(h))$

6.3 最小二乗法による学習

- エラーの定義
 - 二乗誤差 $J(\boldsymbol{w}) \equiv \frac{1}{2} \sum_{\boldsymbol{x}_i \in D} (y_i \boldsymbol{w}^T \boldsymbol{x}_i)^2$

全データに対する 正解と関数の出力 との差の2乗和

- *J* は *w* の関数
 - w を J の勾配方向へ一定量だけ動かすことを繰り返して、最適解へ収束させる

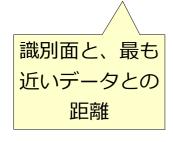


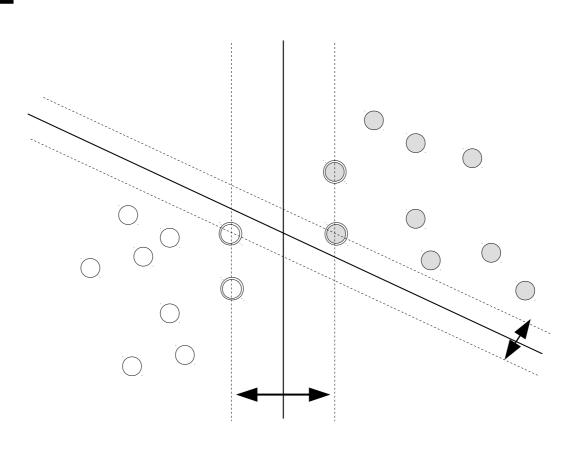
$$\mathbf{w}' = \mathbf{w} - \rho \frac{\partial J}{\partial \mathbf{w}}$$

$$= \mathbf{w} - \rho \sum_{p=1}^{n} (\mathbf{w}^{T} \mathbf{x}_{p} - b_{p}) \mathbf{x}_{p}$$

7. 識別 - サポートベクトルマシン -

• マージンを最大化する識別面を求める

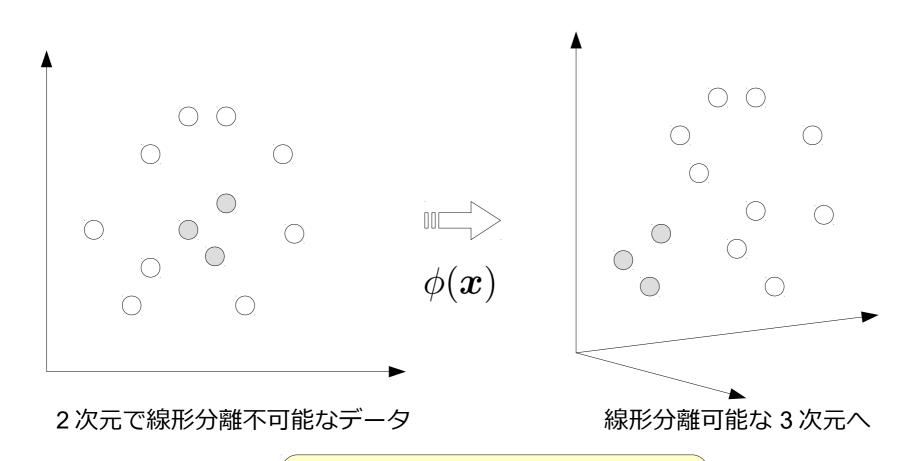




○ ○ : サポートベクトル

7.3 カーネル関数を用いた SVM

特徴ベクトルの次元を増やす



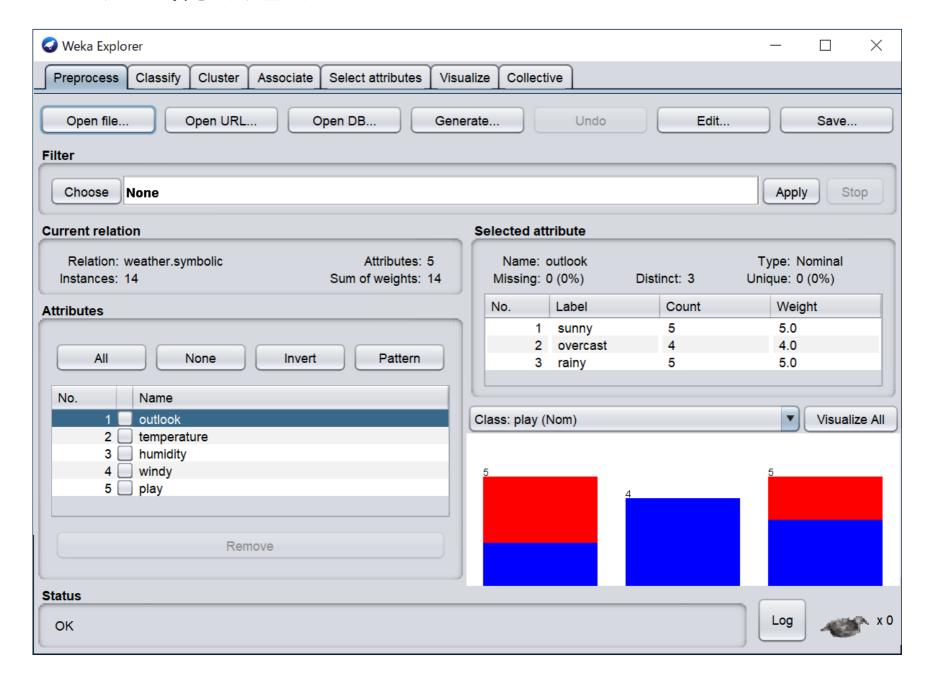
ただし、元の空間でのデータ間の 距離関係は保持するように

機械学習ライブラリの紹介 Weka

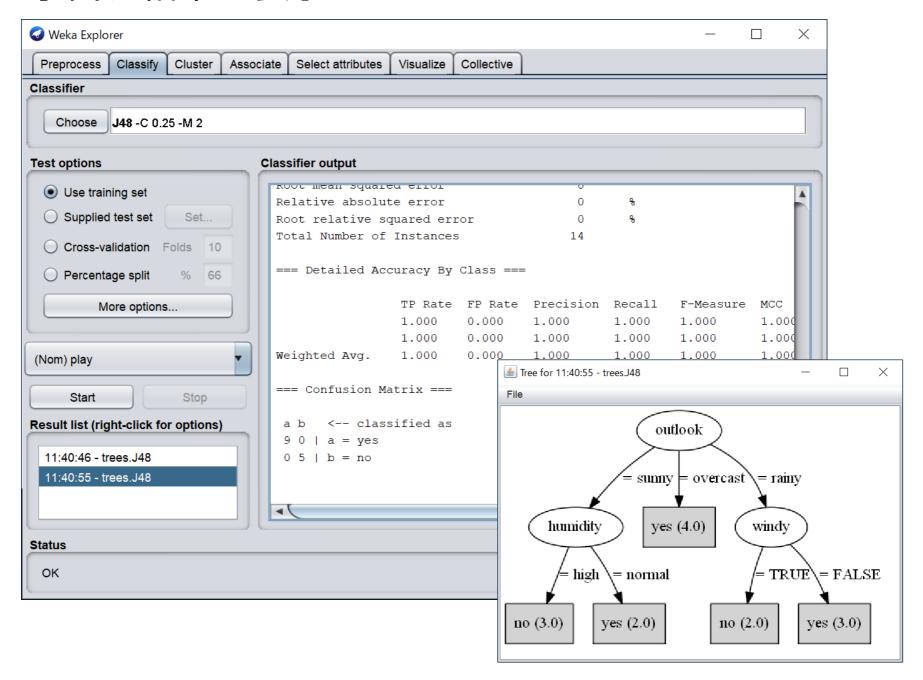
- 機械学習のアルゴリズムを実装した Java ライブラリ
- データファイルを直接操作できる GUI を持つ
- ライセンスは GNU GPL
 - プログラムの実行・改変・再配布が自由
 - ただし二次的著作物に対しても GNU GPL が適用される



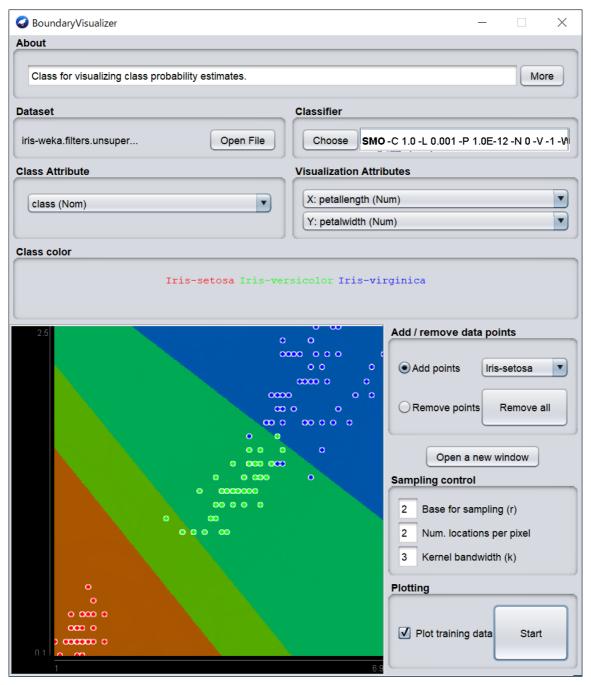
• データの読み込み



• 学習、結果の表示

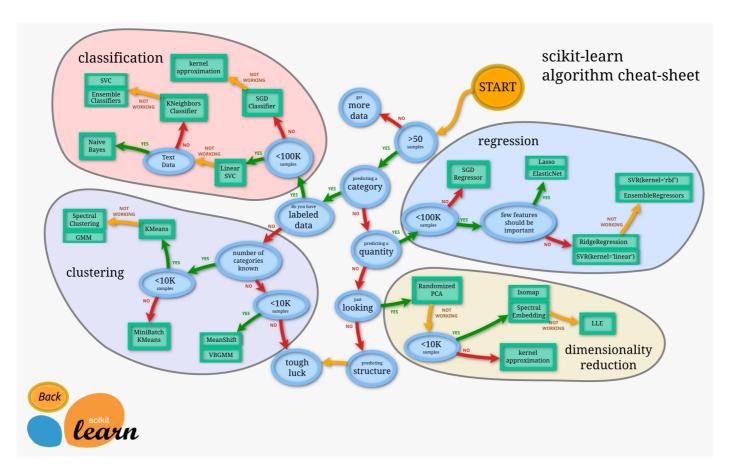


• 学習、結果の表示

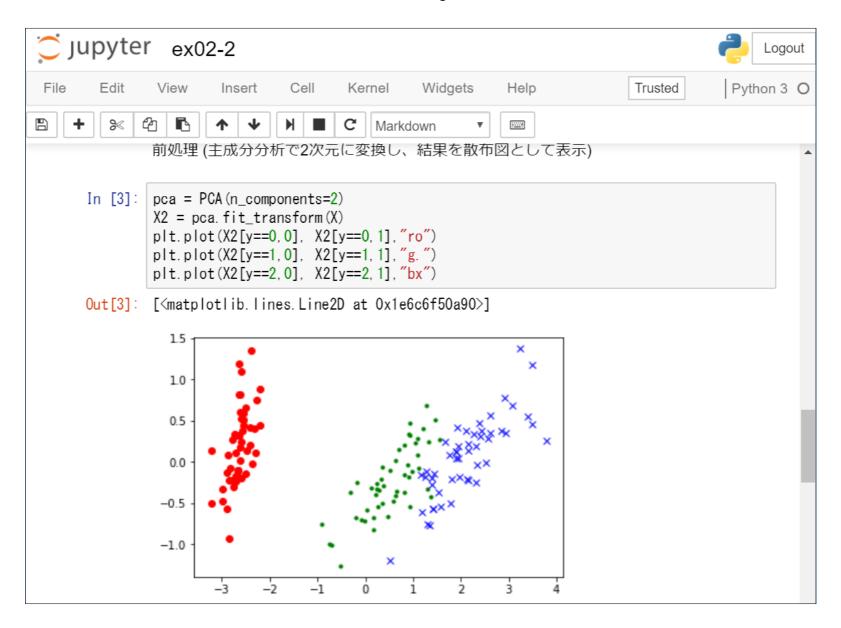


機械学習ライブラリの紹介 Scikit-learn

- Python の機械学習ライブラリ
- 最新のアルゴリズムが実装されている
- Jyputer Notebook を使ったインタラクティブな開発が可能



- Jupyter Notebook
 - ブラウザで実行可能な Python 環境

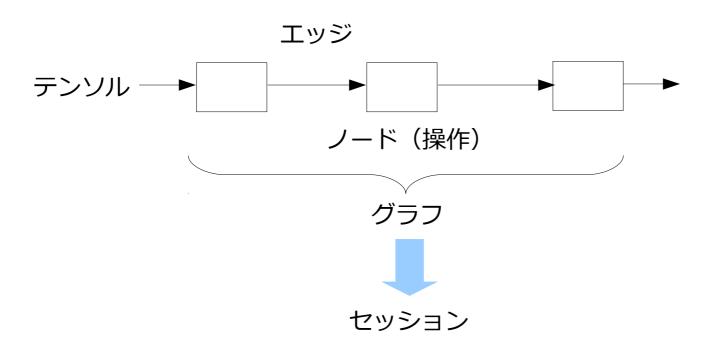


機械学習ライブラリの紹介 Tensorflow

- Google 社が開発した深層学習のライブラリ
- Python がベース
- ネットワークの定義が容易にできるラッパーライブラリ Keras が有用

Tensorflow の基本概念

- テンソル
 - n 次元にデータを並べたもの
 - 1次元:ベクトル
 - 2次元:行列
- Tensorflow のデータモデル

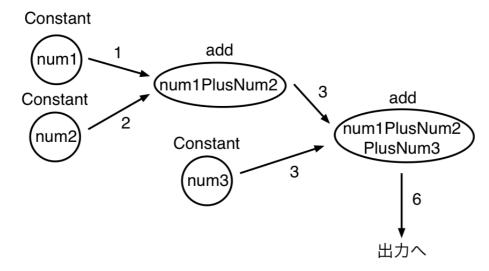


• グラフによる計算の表現

```
import tensorflow as tf
num1 = tf.constant(1)
num2 = tf.constant(2)
num3 = tf.constant(3)
num1PlusNum2 = tf.add(num1,num2)
num1PlusNum2PlusNum3 = tf.add(num1PlusNum2,num3)
sess = tf.Session()
result = sess.run(num1PlusNum2PlusNum3)
print(result)

about 1

co出力に必要な計算は
自動的に行われる
```



Section2 のまとめ

- 統計的識別
 - 識別結果を確率付きで出力することができる
- 生成モデル:データの分布を示す関数を推定
- ・ 識別モデル:データの境界を推定
 - 最急勾配法を用いて誤差最小のパラメータを求める
- 機械学習のライブラリ
 - Weka: GUI で操作できるので初学者の勉強に有用
 - Scikit-learn: 最も広く使われている Python のライブ ラリ
 - Tensorflow: 深層学習のライブラリ